

戦禍の記憶 後世に

資料館設立へきょう準備会

熊本市民など
本団

戦禍の記憶を伝える戦争資料館づくりを目指す。熊本市内の市民グループなどが13日、熊本市中央区で設立準備会を開く。同県内は熊本市だけで617人が犠牲になった熊本大空襲(1945年7、8月)などで甚大な被害を受けたが、当時の記憶を伝える中心的な

資料館がない。準備会は賛同者を増やして機運盛り上げを目指す。市民グループは往年の軍施設や戦火の跡など戦跡保存に取り組み「戦争遺産フォーラムくまもと」、戦争体験を伝承している「新老人の会熊本支部・戦争を語り継ぐ会」など。

戦争体験者の高齢化が進む中、悲惨な記憶を後世に伝える資料館「ピースくまもと(仮称)」設立を目指す。3月に準備会の事務局を結成した。

ピースくまもとは、熊本大空襲の被害調査▽戦争の歴史や戦争遺産の学習▽次世代への継承——などの拠点。事務局長の高谷和生と

ん(63)は「あらゆる戦争資料を展示して平和学習の場になりたい」と話す。

13日の設立準備会は午後2時、熊本市中央区のくまもと県民交流館パレアで開催。熊本大空襲を経験した赤木満智子さんら3人を講師に、意見発表やワークショップなどで資料館について考える。参加には資料代として500円が必要。定員100人。問い合わせは高谷さん090・1513・55288。

【城島勇人】

南九州の戦争資料館



南九州では鹿児島県の「知覧特攻平和会館」(南九州市)と「万世特攻平和祈念館」(南さつま市)などが知られる。

知覧は特攻隊員の遺品など約1万5000点を収蔵。来館者は11時から半減したが2017年度は38万人が訪れた。

宮崎県は「県遺族会館」(宮崎市)の千人針や軍用品など展示品124点を県のホームページ「デジタルミュージアム『宮崎の戦争記録継承館』」で紹介。出征や疎開の体験を語る14人の証言も聞くことができる。2008年の開設以降、延べ約7万人がアクセスしている。